

審査に敗れた川崎は複葉小型のKD A15を自主製作します。最大速度335キ/時、上昇限度1万^メという性能を発揮し、折りから勃発した満洲事変のため91式と併用として92式戦闘機として制式化され380機が生産されました。



複葉だった92式戦闘機
(液冷エンジン)

複葉機を採用した陸軍航空の近代化は数年遅れたと言われています。液冷V型12気筒850馬力で最大速度400^キ、航続距離1100^キでした。588機が生産されました。



尾部を架台に載せて機銃の弾道調整中の
95式戦闘機

内は空っぽでした。おかげで被弾に強く、ノモンハン戦ではしばしばソ連機は火だるまになりました。97戦はあまりそうしたことにはなりません。航続力を伸ばすためには、危険な胴体内に燃料タンクを設けず主翼下に投下式のタンクを付けました。生産は37年12月から40年末まで行われ、約3400機が活躍します。



ノモンハンのホシウ飛行場の第64戦隊
97式戦闘機

は何処か、どのような戦いが行われるのかを予想してのことです。1式戦闘機の試作1号機の完成は38年12月のことでした。ふつうは長くて1年、あるいは半年くらいで採用が決まるのに、制式採用は41年4月です。おかしなことに2年半にも及ぶ審査期間がありました。中島が97式の採用決定を受けたのは37年12月、その直後に次期戦闘機の試作を中島飛行機は命じられました。

その要求条件は、(1)引込脚、(2)最大速度500^キ以上、(3)上昇力は500^キまで5分以内、(4)行動半径800^キ以上、(5)運動性は97式と同程度以上、というものでした。

■95式戦闘機(キ10)

1934(昭和9)年9月、川崎と中島が新型戦闘機の試作を命じられます。中島は低翼単葉という速度重視の方針で進みました。対して川崎は冒険を避けて旧来からの複葉を採り、この結果、安定性、操縦性、

97式戦闘機(キ27)傑作だった、しかし罪も深かったという声があります。それはあまりに完璧だったために、軽戦至上主義を招いたというのです。次期戦闘機の採用を遅らせ、日進月歩の世界での戦闘機開発の中で「97戦のような」という要求を現場から出させ続けたと言われます。採用は1937(昭和12)年春のことでした。

■過渡期の戦闘機1式戦「隼(キ43)」ここまで見ると、世界の戦闘機の発達に合わせて、およそ2年ごとに新しい戦闘機が採用されています。それはわが国だけのことではありません。当時はどこの国でも、既に使われていた機体に改良を施しつつ、新しい戦局に合わせた戦闘機を開発して行きました。もちろん、次の戦場

海軍の零式艦上戦闘機は「12試艦戦」といわれるように、三菱で試作が決まったのは37(昭和12)年5月です。海軍から出された要求は、(1)最大速度270^キ(500^キ)以上、(2)上昇力3000^メまで3分30秒以内、(3)航続力全力で1・2時間、(4)武装は20^ミ砲と7・7^ミ、(5)無線帰投装置など、(6)空戦性能は96式艦戦に劣らない、というものです。結果が分かっている現在からの後出しジャンケンでいえば、欧米の戦

96式艦上戦闘機を採用します。まだ戦闘機として制式化されました。海上昇性能などで中島機を凌ぎ、95式軍はこの翌年に低翼単葉の傑作機、

わが国初めての全金属製機体で、油圧式スプリットフラップを採用します。敢えて引き込み脚を使わず、燃料タンクも主翼内だけにし、胴体

戦闘機として制式化されました。海上昇性能などで中島機を凌ぎ、95式軍はこの翌年に低翼単葉の傑作機、

結果が分かっている現在からの後出しジャンケンでいえば、欧米の戦

闘機は高速での「一撃離脱」戦法が主流になっていました。高速を生かして後上方などから一撃をかける。失敗したら、そのまま頑丈な機体を生かして急降下して逃げる。

ひらりひらりと秘術を尽くして敵の後ろを取るために旋回を繰り返す、そうした軽快な運動性はあまり重視されません。そうした変化を陸軍はなぜ無視したのか、運動性能にこだわり過ぎたのは何故でしょうか。



所沢陸軍整備学校所属の1式戦闘機
始動車でペラを回す

■キ43は航続力で採用が決まった
海軍の艦上戦闘機は、航空母艦の直衛が主任務であり、襲ってくる雷撃機や爆撃機の撃攘が真骨頂でした。だからこの20^キ砲の装備です。後の話になりますが、ミッドウェイでの空母護衛戦の大活躍はさすがゼ

ロ戦です。また、中型攻撃機の掩護という長距離侵攻戦への対応も考えられていたので航続力も重視していました。

対して陸軍はどうか。そのドクトリンは航空撃滅戦でした。1933（昭和8）年から対ソ連戦の作戦計画も大きく変わりました。それまでの満洲中部への進撃ではなく、沿海州を突進し、ウラジオストクやハバロフスクを衝くという計画です。途中に航空基地も無く、そのため航続力が要求されるようになりました。

知られていないのが、海軍のゼロ戦と隼は同じエンジンを使っていることです。39年12月に飛行実験部が設けられ、翌年5月に福生（ふっさ）（現横田基地）に移動した実験部ではキ43（隼）の試作機や増加試作機を研究機にしました。そこでは97戦に対抗できる戦闘法の開発、航続性能の最大能力の確認を続けます。同じエンジンを使っているのですから、海軍にできて陸軍ができない訳がないということからでしょう。

40年8月に参謀本部から飛行実験部に、タイ国南方からシンガポールを攻撃する爆撃機の掩護ができないかという緊急要求がありました。9

00^キの距離を重爆撃機とともに進撃し、戦闘し、帰還できる戦闘機を41年4月までに2個中隊整備できる可能性を研究せよというのでした。

キ43の最大航続力は10時間に達していました。900^キの進攻は十分可能で、格闘戦も水平面の巴戦では97戦に勝てないが、垂直面のそれなら勝てることが証明されました。こうした結果を元に、陸軍は直ちに中島飛行機に97戦の生産を中止し、キ43の生産準備にかからせます。

こうして長大な航続力を認められて、軽戦闘機である1式戦闘機「隼」はデビューします。次回は重戦闘機として開発された2式単座戦闘機「鍾馗」から陸軍最後の制式戦闘機、5式戦のお話をしましょう。

豆の町（ビーンタウン）から
こんにちは（第5回）

会員家族 住井 円香

■待ちに待った夏休みの多様な過ごし方

ボストン大学では、5月中旬から夏休みが始まりました。8月までの